

平成29年度 第2回東広島市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成29年11月24日（金）
開会9時30分 閉会11時00分

2 会 場 東広島市役所本館3階303会議室

3 出席者 (構成員)
東広島市長 藏田 義雄
東広島市教育委員会
教育長 津森 毅
委 員 渡部 和彦（教育長職務代理者）
委 員 坂越 正樹
委 員 織田 壽子
委 員 長嶋 香穂里
委 員 京極 秀樹

(説明等のために出席した者)
副市長 槇原 晃二
学校教育部長 大垣 勇人
企画課長 神笠 秀治
指導課長 祭田 学

(事務局関係)
総務部長 前延 国治
総務部次長 兼 総務課長 木原 岳浩
総務課 参事 兼 行政経営係長 間所 克成
行政経営係 主査 蔭西 亮太

4 議 事 (1) 東広島市総合教育会議運営要綱の一部改正について
(2) 東広島市の特色ある教育について

5 内 容
○開 会

○藏田市長あいさつ

○議 事

(1) 東広島市総合教育会議運営要綱の一部改正について

<藏田市長>

それでは早速ではございますが、会議次第にありますとおり、2の「議事」に入ります。

本日は議事が2件ございます。

まず、1件目の「東広島市総合教育会議運営要綱の一部改正」につきまして、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

それでは、1件目の議事につきまして、ご説明いたします。

本会議は、平成27年度に設置いたしまして、これまで初年度に教育大綱の制定に係る意見交換を賜ったほか、平成28年度では大学等の連携や国際交流をテーマとして議論をいただきました。そして、前回、平成29年度第1回ではスポーツと観光などに関して、と様々なテーマにつきまして、多くの意見交換や議論を通じまして、共通認識を深めてきていただいたものと考えております。

今年度で設置から3年が経過する状況におきまして、これまでの会議の開催状況や他市での取組み状況等を踏まえまして、更なる円滑な会議運営を目指し、今回、東広島市総合教育会議運営要綱の一部改正を提案させていただいております。

改正案の内容でございますが、まず、1点目は、現在、東広島市総合教育会議設置運営要綱の第4条第1項におきまして、「会議は市長が通知（招集）する」旨の規定となっておりますが、今回の改正によりまして、教育委員会側からも議事の提案や会議招集の要望ができる旨の規定を追加するものでございます。

次に、2点目といたしまして、同要綱第4条第3項におきまして、開催回数や開催時期の規定がございますが、本来の会議開催は、必要に応じて随時行うことが肝要でございますので、今後の会議開催につきましては、必要な時期に、適切かつ柔軟に開催できるような改正を提案するものでございます。

これら2点の改正は、市長部局と教育委員会との間での活発な意見交換を随時・適切に行うことを目的としておりますので、ご審議の程、よろしくお願いいたします。

なお、施行期日につきましては、平成30年4月1日からとさせていただきます。

説明は以上でございます。

<藏田市長>

本件につきまして、事務局からの説明がございましたが、委員の皆様からご意見等がございましたら、お願いいたします。

<各 委 員>

「異議なし」、「賛成」

<藏田市長>

それでは、委員の皆様からのご賛同をいただきましたので、「東広島市総合教育会議運営要綱の一部改正」につきましては、事務局案のとおりとさせていただきます。

(2) 東広島市の特色ある教育について

< 藏田市長 >

続きまして、本日 2 件目の議事「東広島市の特色ある教育について」でございます。

これまで、大綱の基本方針から個別にテーマを選定しておりましたが、今回は、「東広島市の特色ある教育」をテーマとして、「東広島市の特色は何だろうか」、「それを活かした特徴ある教育がどのように展開されているだろうか」といった現状や今後の展開について、改めて皆様と議論を進めてまいりたいと思います。

議事の説明につきましては、事務局からお願いします。

< 事務局 >

それでは、議事につきまして、ご説明いたします。

ご承知のとおり、平成 27 年度に「東広島市教育大綱」を策定しておりますが、当該大綱は、「東広島市教育基本計画」との整合性を考慮し、その策定期間を平成 30 年度までの 4 年間としております。

このため、来年度、平成 30 年度は、当該大綱を見直す時期となります。

現在、教育委員会におかれましては、様々な施策の展開が実施されているところでございますが、今回改めて、本市の特色を活かした教育についての現状、そして今後の取り組みや方向性を考えていく一つの起点とするために、議題の設定をさせていただきました。

大綱策定当時とは、本市教育を取り巻く情勢が変化している中で、本市教育の今後の方向性等を含め、委員の皆様にご議論をいただきまして、本市の教育行政を推進するための基本指針となります、次期教育大綱の策定につなげて参りたいと考えております。

議題についての説明は、以上でございます。

< 藏田市長 >

ありがとうございました。

早速ではございますが、東広島市の特色ある教育につきまして、現状や他市の状況、今後に向けた取り組みなどを、教育長からお話しいただきますようお願いいたします。

(教育長説明【資料 2】)

< 藏田市長 >

ありがとうございました。

東広島市における高い学力については、今回、教育長にお話しいただいたとおり素晴らしい結果を示しており、改めて、児童・生徒のみんな、それに学校の先生の皆様が頑張っている様子が目に浮かびます。

また、暴力行為や不登校人数の割合が、国や県の平均よりも低い数値を示しており、心の教育にも力を注がれていることが伺えます。

一方で、学校の先生の負担も年々増えてきていることから、教育委員会としてもその対策を進めていらっしゃることと思います。

まずは、現状の取り組みについての思いや、今後の新たな取り組みのご提案などがあれば、

ご意見を伺いたいと思います。渡部先生、いかがでしょうか。

<渡部委員>

今のご説明で、非常に斬新な方向性を示していただいたと思います。いくつかある中で、英語教育の充実と、大学との連携について、印象を強く受けましたが、松賀中学校の4年間の成果として、文科省が目標として掲げた英検3級レベル50%をはるかに超えたということで、集中してきちんとすれば成果が上がるということが実証されたのだと思います。その上で、その中身のどういうところがよかったのかを検証することで、他の学校へ経験を広めることができるのではないかと思います。

八本松中学校で研究会がありまして授業を見たのですが、英語に関しましては、ICTを非常に上手に使っておりました。子供も全員が参加してレスポンスがいい。こういうことを見聞き致しまして、先生の教育力ですね、今までのICTがない時代は、先生の発音とかを基に学んでいたのに対して、きちんと事前の準備をして、授業の初めから終わりまでのストーリーができていて、それを先生が活用できるという、その活用のスキルが大変素晴らしいとの印象を持ちました。

先程、ALTの増員という課題のお話があり、これはこれで大事だと思いますが、システムを上手に使えるような教員の指導力、教材をどのように適切に生徒に伝えていくか、そういったところの良い例を学ぶ研修への参加の機会によって、各学校で活用していけると考えました。

もう一つ、大学との連携について、単発的に実施するのはいいのですが、受入の体制ですよね。大学のニーズにも応えられるかという点で、具体的にどのように進めていくのか、現職の先生方もいらっしゃいますので、ご意見を伺えればと思います。ただ、理科教育について、広大マスターズの先生が入っている例があります。理科の実験を子供たちにマスターズの公開講座としてやっておりまして、非常に子供たちの反応がいいことから、この先生も元気を出してまた自主的に来年もやろうと張り切っております。大学の専門の先生が自主的に最先端の知識をわかりやすく子供たちに伝える事例もありますので、もう少し組織的に実施できれば面白いかなと感じました。

<藏田市長>

ありがとうございます。

今、おっしゃられたように、目に見えないところでマスターズの先生に随分お世話になっているということで、本当にありがとうございます。いろいろなご意見をいただきましたが、ひととおり皆様にご意見をいただきたいと思います。織田先生、如何でしょうか。

<織田委員>

今回、教育長から平成30年度以降の世界標準の教育という新しい取り組みについてのお話があり、東広島市の教育の良さともう一つ、世の中が変化してきている中で、それに応えられる教育ということで、非常にワクワクしているところです。

10の課題と7つの施策の方向を出していただいておりますが、2番目の「学力の底上げ－育て残している子どもたちへの支援」について、家庭的に恵まれない子どもたちへの指導を土曜日に取り組んでおります。最初は何となくそわそわして落ち着かない雰囲気でしたが、

この間、そこに行きましたら、本当に落ち着いた雰囲気の中で、子ども達の学習態度や意欲を感じました。あきらめずに取り組んでいくことによって、成果が出てくるのではないかと感じたところです。高い教育水準にしていかななくてはならないのですが、育て残している子どもたちを大事にしていくということはありがたいことだと思っております。

発達障害の対応というのも、発達障害の子によって、学級崩壊の原因となっている場合があります。先日の八本松中学校での研究会で、特別支援学級の授業を見せていただいて、先生方が専門的な知識をもって、指導に当たっていらっしゃるということを強く感じました。そういった教員の養成、育成も大事だと考えております。

それから、新しい形の学校支援策ですが、退職教員の活用やシルバーセンターの設置は前々から何かできればというところで、私たちのグループも考えておりました。65歳までの再雇用というところで、最初に考えていたときの条件と異なりますが、学校の若い教員が増えている中で、まだまだ元気な退職者もあり、人間関係、信頼関係の中でしっかり学校を支援していきたい思いはありますので、是非活用していただきたいです。

<藏田市長>

ありがとうございます。私どもも心配しておりますが、発達障害の子が随分と増えてきております。心を落ち着かせてあげるのが一番だと思いますけど、その点についても取り組んでいかなければいけないテーマだと思います。

京極先生、如何でしょうか。

<京極委員>

非常にうまくまとめられており感心しました。たくさん取り組んだ方がいいというのはありますが、先程、教育長がおっしゃったように、これだけのことをやれば教員の負担が非常にかかると思いますので、やはり外部の力を如何に借りるか、これはお互いが win-win のところになると思いますが、そういう仕掛けをきちんと作っていかないとなかなか難しいのではないかなと思います。東広島は市の伝統もありますし、教育力も高く、大学があるのですが、この中には入っておりませんが、他にも企業や研究所もありまして、外部の力を借りるということと、子どもたちを教育するのに自然を活用することも非常に大事だと思います。

今、子どもたちがバーチャルの世界にどんどん逃げているので、現実の世界で自然を体験しながら教育が受けられるということが大事でして、先程のお話しに繋がってくると思うのですが、1点は英語教育について、学校の教育とすれば点数が伸びておりますが、もう一つ、外国人とどれだけ触れ合っているかがすごく大事で、本市にはたくさんの外国人がいらっしゃいますので、そういう場を設けるような仕掛けは一つ必要なのかなと思いました。読解力のところも大事で、大学のことになりますが、読解力が少ない子が多いので、先般の生涯学習フェスティバルのときの図書館の取組み、あれはすごくいい取組みだなと感心いたしました。ああいった外の力を借りながらやっていく取組みも大事だと思います。

それと、大学の活用、企業の活用ということで、先日、企業出身でJSTに行かれています方とお話しする機会がありました。現在教育に力を入れておりまして、学校の先生だけではなかなか理科系の話は難しいところがありますので、実体験をきっちり、話をする、あるいは体験することを企業サイドとしてもサポートしたいとおっしゃっておりました。せっかく

ここには企業が多いので、企業を含めて、先程、教育長がおっしゃられた体験型の内容に取り組んで、外の力を借りることを具体的な項目にしていけたらいいと思います。

大学も今、忙しい状況にありますが、そうは言っても、15年ぐらい前に高屋地域の中学生を受け入れるような取組みで夏休みに、理科の実験等をしたことがありますので、大学としても地域との連携ということで大事だと思いますので、大学で対応できる範囲で活動させていただきたい。市民への公開講座はありますが、小学校・中学校の公開講座はすごく大変なので抜けているところもあって、もう1回見直すところはあるのかなと思います。いずれにしても、体験をさせる教育として、具体的な項目をいくつか取りまとめていけば、子どもたちが本当の力を付けることができるのではないかと思います。

<藏田市長>

ありがとうございました。実は、近畿大学には子供たちのスポーツにも力を入れていただいておりますし、実験でロケットを飛ばすことにも取り組んでいただいております。ありがとうございます。長嶋委員どうでしょうか。

<長嶋委員>

教育長がおっしゃられた世界標準の教育について、家庭でどういう風にサポートしていけるのか考えた時に、子どもたちが安心して取り組んでいけるように、まずは家庭が安心できる場所という環境を作っていかななくてはならないのかなと。そこには、家庭だけでなく、地域の皆さんにも協力していただいて、たくさんの目で子どもたちを見守る姿勢が大事だと思います。

それから、こういう取組みを保護者の皆さんに知っていただく機会が少ないと思います。ですから、子どもたちが学校でどのようなことを勉強しているかということを保護者のほかに、地域の皆さんにも繰り返し知っていただいて、それから各家庭でどのように子どもたちをサポートしていくかということを家庭であり地域で考えていくことが大事ではないかと思います。

また、学校に入ってからというよりも、もっと若い世代の方たちにもこのような取組みについて知っていただいて、自分たちがどのように子どもと関わっていけばいいかということ子どもが小さい時から考えていけるような取組み、具体的には思い付かないのですが、考えていただければいいかなと思いました。

<藏田市長>

ありがとうございます。本市では、47小学校区全てで住民自治協議会を作っていただいております。子どもたちの見守り、見回り、交通安全等、随分とご尽力いただいております。もう少し掘り下げて理解をしていただくということもおっしゃられたことではないかと思います。坂越先生、如何でしょうか。

<坂越委員>

キーコンセプトのページを見ながら、まずは全体的なことですが、こういった大きな課題を抱えているときに、教職員の資質についてのお話でしたが、本当にそのとおりなんですよね。その部分で、教職員の指導力向上に広島大学が助力できるだろうなどの思いをすごく持っております。現に、いろいろな連携関係があって、市の指導主事の先生が大学の

授業の講師として来てもらっておりますが、資料の最後の方に「連携事業の再構築」という言葉があります。是非、これを組織対組織の関係を強めていって、それをベースにしながら、例えば、グローバルでこういった授業をしたいときにどうすればいいのだろうかといった場合、先生が直接、教育学研究科の先生の研究室に飛び込んでいって、どうしましょうかと聞くことができる関係ができれば、東広島市に位置する国立大学として役割が果たせます。実はこういう形で教員の研修に関わることは、今、国立大学の教育学部にすごく求められておりまして、地域に対して一つの存在意義を打ち出すことは、大学にとってもメリットがあります。それを進める窓口をきちんと作っていく必要がありますので、市の方でも大変かと思いますが、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それから、いわゆるグローバル・スタンダードというのは、大学とかでグローバル、それから今言われているのが高校とかでのスーパーイングリッシュ、これを小中学校に下ろそうというのはすごく斬新、テーマとしてはかなり大胆だと思いますが、よくよく考えますと、資料の中の「視点①東広島市の強みを生かす」ために何をするかと言ひますと、英語教育の目標設定、PISA型学力の育成、ICTの活用とか、これは、OECDが求めている世界で通用する人材の能力なんですよ。新聞にも話題となっておりますが、仲間と協力して課題を解決する力が今回のOECDのテストで測られたりしておりますけど、世界で通用する力を意識する学校教育、カリキュラムが当然あってもいいと思ひますし、世界で通用する教育内容でもって教育することを通して、今度は世界で活躍する人材を育成していくことがグローバル・スタンダードのキーコンセプトであろうかと思ひます。

また、少し個別的なことになりますが、大学との連携で「視点③大学を学びのキャンパスに」の中にある中学生が最先端の学びを体験、これは今でも一部取り組んでいるところがありまして、附属小学校の小学生たちが大学に来て、いろいろな研究室に行ったりしておりますので、大学もある程度経験済みのところがあり、受け入れ可能かと思ひます。それから、インターンシップ、教育実習、今度は大学生が学校に行く方ですが、教員免許法が改正されて、学校体験実習をきちんと単位にしましょうという仕組みが平成31年からスタートしますので、そのあたりも大学の教育学部と話をすれば、今のボランティアも重要ではありますが、単位がある授業で大学生がやってくるといった試みがあります。

それと、これはアイデアとしてですが、せっかくグローバル化する小中学校ができるのであれば、もう市のレベルで小学校をグローバル化してしまう。どういうことかと言ひますと授業もそうなんですが、英語もそうなんですが、少し大学の要望が入るのですが、大学には家族連れの留学生や研究者が結構来てて、半年とか1年とかいる訳です。例えば、三ツ城小でも中央中でもどこでもいいのですが、ここの学校だったら3カ月でも半年でもいつでも来ていいよ、大歓迎します。どこの国からきてもいいよと。最初は日本語がわからないかもしれませんが、必要なサポートはしますし、どうぞ日本の学校を体験してってください、というようなことになると、周りの子どもたちもかなり影響を受けるであろうと思ひたりもします。全体的にカリキュラムなりをグローバル化していくという仕組みと同時に、エキストラで特化して、ここに来ればこういった取り組みが見えるよというものを作るのも一つ面白いかなと考へました。

<藏田市長>

面白いですね、ありがとうございます。いろいろなご意見をいただきまして、教育長、最初におっしゃっていただいたことに対して、何か思いがございましたらお話しください。

<津森教育長>

いろいろなご指摘、ご意見をいただき、ありがとうございます。広大マスターズのことや企業、研究所のことも抜けていたと思います。家庭とのことも大事でございます。そういった中、坂越先生からの御意見で、高校・大学で課題となっていることを小・中学校まで下ろしてくることは大胆だということで危うい気もいたしました。やはり、先程グローバル・スピードアップや県のことを申し上げましたが、大きな予算をかけて、特定の子どもに、そういう教育の場を持っていくだけでは、これからは人材育成が間に合わないということがございます。

それと市長も常々言うておられます、わんぱくでもいい、たくましく育てほしいという部分は時代が変わっても大事にしなければいけませんので、あえて課題としての施策の方向性には出しておりませんが、部活動で鍛えることは大きなポイントでありますし、いろいろなアスリートに接する機会は大学連携でできることだと思います。この辺りも少し含めて考えていくことが必要であると感じさせていただきました。ありがとうございます。

<藏田市長>

坂越先生が言われたように、広島県内でもインターナショナルスクールを安佐北区の方で展開しており、これもすごいと思いますが、県内全域から子供たちが通うわけではありません。その中で、東広島に小学生、中学生クラスがどの程度いるのだろうとなったとき、半年しかいないけど、小学校、中学校に行かせてほしいということは、非常に画期的であり、子どもたちの接する能力、テンションもものすごく上がると思います。外国人として見るよりも、子どもとして見て付き合っていけるレベルがあるのではないかと。これは、グローバル化するのに一番いいのかもしれないですね。いろいろな制約があり、厳しいのかもしれませんが…。

<津森教育長>

子どもたちも含めた外国人市民と接する機会を作っていくことが、やはり国際性の育成には欠かすことができないと思いますので、この辺りは教育委員会だけではなく、様々な部局と連携をしながら、大いにそういった機会を作っていきたいと思います。

<藏田市長>

今は、そういった外国の子供たち、例えば、親が研究で来ているとか、就労で来ているとかいった子どもたちはどうされているのですか。

<津森教育長>

もちろん、就学年齢にあれば、地域の小・中学校で受け入れておりますが、例外はございまして…。

<坂越委員>

ちょっといいですか。例えば、留学生でありましたら、3年とかの期間で来ますので、夫

婦、子ども連れで来てて、公立の小学校にお世話になっているパターンもあれば、むしろ心配なので連れてきていない家族もあります。こんな受け入れ体制があるということをアピールすれば、それなら行こうかという効果も当然あるだろうと思います。

<蔵田市長>

大学側も留学生を増やしていく計画を立てておられますので、受け皿も必要になってくると思います。

<津森教育長>

坂越先生、中学生はあまりいないように思うのですが、いかがですか。

<坂越委員>

向こうでのキャリア等のことも考えますから、あまり大きい子は来ていないかもしれません。幼稚園、小学校、それから数は少ないですが、安佐北区のインターナショナルスクールがあったりして、無理をしてでもそちらに行くパターンでしょうか。

<津森教育長>

織田先生は、留学生の子どもたちとの教育の効果というものは何か経験がございませんか。

<織田委員>

私が御薗宇小学校におりました頃、広大の留学生や中国からの帰国者のお子さんが結構おられ、子供同士のトラブルも見られました。そこで、国際理解教育を取り入れました。子どもたちには国際的なものの見方や考え方が少しずつ浸透していったように思います。

一方、地域や保護者への啓発を人権学習研修会等において実施しました。今でも地域と一緒にやる運動会やとんど祭りには、JICAの研修員が招待され、国際色豊かな行事となっています。

<津森教育長>

私も学校におりました時に、留学生のお子さん、中国の方だったのですが、中国語ではどうにもできないのですが、その子は英語が話せるんです。しかし、日本の子が英語を話せないで、その点が難しかったということがありました。中学校であれば、互いに話ができたと思うのですが、これから小学校でも英会話の機会として活用することは充分可能だと思います。

<渡部委員>

東広島には広島大学などの大学だけでなく、企業もたくさんありまして、外国人も来られております。本日の話は英語が中心となっておりますが、京極委員がおっしゃられたように、英語のテストはできるけど実際に会ったときにどうなのかというところが問題です。小さい頃から外国人と接することが大事でして、そういう意味ではいろいろな国の方が来られていて、JICAでもホストファミリーを募集しておりますし、地域の中に外国人の方が入っていきやすい土壌を作っていくことが大事なのではないかと思いました。

<蔵田市長>

仲間同士で話をしている内に、いつの間にか英語を覚え、文化を理解していくのが一番なのかなと思います。子どもたちが友達となったら、将来、お互いの国に何かあった時、すごく心配をして、面倒を見てくれるようになります。これがグローバル化の大きな力ではない

かなと思っておりますので、そういったことも含めて、子どもたちを受け入れる学校の力は大きいのですが、一方で、教員の負担がものすごく大きいのではないかと京極先生におっしゃっていただきました。中学校の20代の先生が少ないとの資料がございましたが、今、中学校では部活動を実施していますよね。この部活の面倒を見なければいけない。大体、土日に試合があったりして、休む時がありません。中学校の教員にとって、部活の先生になりたい人、なりたくない人がいらっしゃって、そこが20代の先生が少ないところなのかなという気がしているのですが、如何でしょうか。

<津森教育長>

全国的に問題となっていて、やりたくない人ほど本来の仕事ができないという意識が高い、やりたい人はそのようには思わない訳です。しかしながら、東広島の地域においては部活動に対する要望、期待感が非常に高いのが事実でありまして、何とか部活支援者のような制度を考えなくてはならないと思うのですが、一方でやりすぎる面もございますので、どこかで整合性を図っていきたいとも思います。今の40、50代の先生は有無も言わず、部活は頭からやるものだとして受け入れてやってきておりますが、これからやっていく人は何故するのかと考える人が増えると思いますので、やはり、今までのようなやり方自体を考えなければいけないのかなと思うところでして、大きな課題の一つでございます。

<藏田市長>

中学校3年間のスポーツ、勉強、仲間というのは、生涯のすごい力になると思います。先生がおっしゃったとおり、学校と地域の連携をしながら、子どももしっかりと見なければいけない、先生の負荷が随分と高くなっている。ここを私が一番心配しているんですよ。先生たちもクラブ活動を見るだけでなく、成績もつけたり、PTAの相手もあつたりと何もかもしなくてはいけなくなっている。何か負荷が少なくなつて集中できるような方法はないかと思っているんです。

<京極委員>

本当にこれは難しいと思うのですが、できるだけ地域の力を借りる仕組み、先程、坂越先生がおっしゃったように、教育委員会にも大学などへ要望する、企業や研究所へ要望するというように具体的な項目を作っていく、それをシステムティックにやっていく仕掛けが必要で、それが次の段階の東広島の教育委員会のやることかなと思います。

もう一つ、先程のお話しの中で、JICAがここにありますよね。私が留学をしていた時に、ある大学の先生が小学校に上がる前の子どもさんを連れてこられて、何か月か英語の研修をしたと思うんですけど、今後、グローバル化をしていく場合、そういう仕組みにしていかなければいけないのかなと思います。小さいときはあつという間にネイティブになりますし、市長がおっしゃったようにすぐに慣れますから、そういう仕掛けをJICAとの連携の中でやっていくといいのかなと。そういう意味で、東広島はものすごく整っていると思うんです。それを如何にシステムティックに東広島の教育に活かしていけるのかが大事だと思います。

<藏田市長>

そうですね、改めてそういったところも見直しが必要ではないかなと思いますね。

子どもたちも今は日本語をしっかりしなければいけない、英語を勉強しなければいけないということで遊ぶ時間があるのかなと少し心配になりますが、教育長におっしゃっていただいた、わんぱくでもいい、このわんぱくな面がだんだん少なくなっているのかなという気がしております。それでは、発散する場所はどこかとなると、クラブ活動かスポーツしかないと思うんです。そこの充実をしてあげないといけなくなっている。例えば、中学校の先生が必ずやらなくても地域の方で見てくれる人がいるのか。あるいは、他にやりたい方がどれだけいらっしゃるのか。指導と監督をするのと、元教員の立場としてはいろいろとあるかもしれませんが、ある程度のレベルの高さで、スポーツを通じて教育と一緒にしていただける、こういうものもいるのではないかと考えているんです。

<京極委員>

今見ると休みの日に、うちの大学では、少年野球やサッカーなど、皆さん結構見られているんですね。そういうところを少し市としてもまとめていかれて、連携するような形をされるといいのかなと個人的には思います。

<藏田市長>

スポーツの世界でいえば、レベルの高いところを見ると、とんでもない世界に見えて、ものすごく驚くんですね。ところが、年代が近づくにつれて、それなりに自分が成長していきこうと思ったらものすごくやりかけるんですね。だから、そういう点では、大学とか地域とかをもっと活用させていただくということがあるのではないかと思います。

あと、私たちが思うのは、学校のあり方、例えば、まだPTAの話が出ておりませんが、PTAの方々がどういう風におっしゃられるのかという学校のことがございます。

織田先生、その辺り何かありませんか。

<織田委員>

多くの小学校では、PTAや地域の方々がスポーツ教室の指導やお世話をしてくださっています。学校としてはありがたいことですが、かつて、指導に熱が入り、学校行事よりも対外試合を優先するということがありました。学校側としては、長い間、発表会に向けて練習をさせながらも当日は欠席という事態となり、複雑な思いをしたことがありました。

学校とスポーツ教室の連携が重要不可欠だと思います。

<藏田市長>

いろいろな地域を見させていただいて、英語教育について、西条の市街地の学校と少し離れた小学校、中学校では同じように思っているのでしょうか。

<坂越委員>

環境、条件が西条の市街地とそれ以外の地域で差があると思うんですね。ただ、新しい学習指導要領では、中学校の英語がどんどん変わる、小学校から英語が始まるということで、やっていかなければならない状況にあるのは確かです。今、小学校5年、6年を持ちたくないという方も出てくると思いますが、そのサポートを教育委員会がしっかりやって、さっき出てきましたALTを手当して、というところは教育長よりも市長にお願いしたいと思いますが…。

<藏田市長>

そうなりますと、本市全体の英語教育の浸透のあり方、方向性を教育長にお話ししていただくのが一番かなと思います。

<津森教育長>

今、小学校で英語の免許を持った教員、あるいはTOEICでいい点を取っている方、英検を持っている方となると5%ぐらいで、はるか昔のものも含めてのことですので、小学校教員に能力が十分でないのは明らかです。ここをどのようにサポートしていくのかが大きな課題として認識しておりますけど、学校統合の中で複式の解消というときに、地域の方が一番理解されるのは、1つの教室で英語ができないということです。先程、坂越先生からありましたが、英語が入ってきてどうなるのか、といった関心は高いと思っておりますので、これに対応した取り組みを何とか進めたいと思っております。

それとお話しを伺って、整理が必要と思い始めたことがございまして、世界標準といったときに、諸外国の学校の教職員はどうかと考えた時に、授業以外はやっていない訳でありまして、授業以外は地域が受け持っております。しかし、日本ではすぐにそういった仕組みに持っていけない。そのところをどうするのか、世界標準を謳うのはいいけれど、教職員の負担を減らすなどの仕組みをセットで考えていかないと別の面で不安があるかなと議論を聞きながら、感じさせていただきました。

<藏田市長>

専門の先生になりますし、教材をある程度準備するのも大変ですよ。

<津森教育長>

文科省の方で教科書は揃いますが、例えば、私が教えるとなった時に、読んだり書いたり は教えられるかと思いますが、話したり聞くとこは、ICTの活用が必要になってくると思います。ただ、冒頭申し上げました本市の授業研究を熱心に取り組む伝統の中で、先生方もその点については頑張ってくれるのではないかなとの期待を持っております。

<藏田市長>

ありがとうございました。本日の意見交換については、これくらいにとどめます。

本日は、「東広島市の特色ある教育について」をテーマに、特に英語教育についてのお話しをしていただきましたが、教育委員会において、どのようなお考えで取り組まれているか、また、今後の方向性についても伺うことができました。

また、委員の皆様におかれましては、豊富な経験と知識をもとに貴重なご意見もいただきました。

こうして教育行政の最新情報に触れながら、本市といたしましても、教育面でどのように力を入れて取り組む必要があるのか、関連部署で実施する施策との連携はどうあるべきか、など考察すべき点は多々あるかと思います。

本日の意見を参考にして、本市の教育行政を更に推進いたしますとともに、次期大綱の策定につきましても、市長部局、教育委員会の双方が連携いたしまして、進めてまいりたいと考えておりますので、委員の皆様方におかれましては、引き続き、ご尽力を賜りたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、本日の会議はこれをもって閉会といたします。

次回の開催は、来年度となる予定でございますので、よろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

○閉 会